

ゼカリヤ書7-8章 「真実と平和の町」

1A 憐れのない町 7

1B 自分自身のための断食 1-7

2B 金剛石のような心 8-14

2A エルサレムへの激しい愛 8

1B 真実な町 1-8

2B 平和の種 9-17

3B 恵みを請う人々 18-23

本文

私たちは、先週、ついにゼカリヤの見た八つの幻を読み終えました。そして来週、9章から、キリストが来られることを預言する、終わりの日の幻に入っていきます。ろばの子に乗り、エルサレムに入城されるイエス様、そして銀貨三十枚で裏切られるイエス様の姿も預言の中に出てきます。その9章からの預言に入る前に、神殿の再建において、とても大切な戒めを主が与えられている出来事を見ていきます。私たちも今、教会が建て上げられていく、その最前線、現場にいます。彼らが通っていることと、私たちが通ること、共通点があることでしょう。

1A 憐れのない町 7

1B 自分自身のための断食 1-7

7:1 ダリヨス王の第四年の第九の月、すなわち、キスレウの月の四日に、ゼカリヤに主のことばがあった。

時は、「ダリヨス王の第四年の第九の月」です。西暦に直しますと、紀元前518年12月7日です。神殿建設が阻止されていたけれども、ダリヨス王第二年の六月に、ハガイが預言を行なったことを思い出してください。そして彼らは仕事にとりかかり、第九の月に礎を完成させました(ハガイ2:18)。ですから、ちょうど二年前に工事が始まりました。そしてエズラ記6章15節を読みますと、神殿の完成はダリヨス王の治世、第六年のことです。第六年は紀元前516年のこと、神殿破壊された586年のちょうど、七十年後のことです。ということで、今は、ちょうど神殿再建の工事をしている半ばに来ていると言えるでしょう。

その時に、「ゼカリヤに主のことばがあった」とあります。この表現が、7章と8章で四回出てきます。ここ7章1節、それから8節、次に8章1節、それから8章18節にあります。つまり、7章と8章は、合計、四つの主からのメッセージ、御言葉になっています。

7:2 そのとき、ベテルは、サル・エツェルとレゲム・メレクおよびその従者たちを、主に願うために遣わし、7:3 万軍の主の宮に仕える祭司たちと、預言者たちに尋ねさせた。「私が長年やってきたように、第五の月にも、断食をして泣かなければならないでしょうか。」

「ベテルは」とありますが、これは人名ではなく、地名です。ベテルの町が、この人々を主に願うために遣わしました。ベテルといえば、ホセア書などにも数多く出てきました。北イスラエルの南端にある町で、初代の王ヤロブアムが金の子牛を造らせて、いけにえを捧げさせたところです。偶像礼拝を盛んに行なっていたところでもあります。そういった背景の人々がここにやって来ました。ここの代表者の名前は、「サル・エツェル」と「レゲム・メレク」です。これは、バビロンの影響を受けたものです。彼らは帰還の民です。そして、「断食を第五の月に長年やってきた」と言っています。神の律法では、贖罪日、ヨム・キプールの時のみユダヤ人に断食を命じておられますが(レビ 23:32)、紀元前 586 年、第五の月にネブカデネザルは、エルサレムを破壊しました(2列王 25:8)。それで、彼らはそのことを悲しむために自主的に断食を行なって、バビロンの地ですずっと行ない続けていたのです。

彼らは、自分たちの身に招いたことを痛恨の思いで断食していたのだらうと思われます。そして確かに、バビロン捕囚後の歴史において、ユダヤ人の中には偶像が取り除かれました。けれども、実はバビロンから持ち込んだものがありました。それは、富への貪欲であったり、その他の肉の欲です。ホセアが預言した時に、北イスラエルが繁栄して、その中で不正義が行なわれていたことを主が咎められました。ここに落とし穴がありました、物理的な偶像は取り除いていても、実は心が古いままでいたという問題です。状況を一新させても、心が変わっていないということがしばしば起こります。

彼らは、既に新しい神殿が建てられているのに、神殿が破壊されたことを悲しむ断食を続けていてよいものかを尋ねています。しかし主は、意外な形で彼らを叱責されます。

7:4 すると、私に次のような万軍の主のことばがあった。7:5 「この国のすべての民と祭司たちに向かってこう言え。この七十年の間、あなたがたが、第五の月と第七の月に断食して嘆いたとき、このわたしのために断食したのか。7:6 あなたがたが食べたり飲んだりするとき、食べるのも飲むのも、自分たちのためではなかったか。

ベテルから遣わされた者たちに対してではなく、「イスラエルの全ての民と祭司たち」に向かったの言葉です。彼らがこのような質問をしたのですが、それはイスラエル全体、神殿で仕える者たちにも共通した課題があったからです。主はまず、第五の月だけでなく、「第七の月」にも彼らが断食していたことを告げられます。彼らの心の中のことを話していたのですね。第七の月は、エレミヤ 41 章によりますと、神殿破壊後、エルサレムに僅かに残っていたユダヤ人が、バビロンによって遣わされた総督ゲダルヤ、彼自身もユダヤ人ですが、ゲダルヤをイシュマエルという人物が殺害しました。そのことも覚えて、断食していたようです。

しかし、ここで「このわたしのために断食したのか」と言われています。そうです、断食することが自己目的化していました。そして、「あなたがたが食べたり飲んだりする」と主は言われますが、こちらは申命記 12 章 5-7 節に、例祭において家族ごとに祝いなさいという命令があります。断食しているにしても、主への祭りの中で食べているにしても、自分自身のためではないか？と叱っておられます。宗教的な熱心はあっても、その動機の奥底には、自分自身のためというものがあったのです。主に對する礼拝ではなく、自分の修養のためになるから、という動機が働いていました。そして、このように動機というものは、自分自身をも騙してしまうぐらいなものです。しかし、主の言葉はそれを明らかにします。「神のことばは生きていて、力があり、両刃の剣よりも鋭く、たましいと霊、関節と骨髓の分かれ目さえも刺し通し、心のいろいろな考えやはかりごとを判別することができます。造られたもので、神の前で隠れおおせるものは何一つなく、神の目には、すべてが裸であり、さらけ出されています。私たちはこの神に対して弁明をするのです。(ヘブル 4:12-13)」

7:7 エルサレムとその回りの町々に人が住み、平和であったとき、また、ネゲブや低地に人が住んでいたとき、主が先の預言者たちを通して告げられたのは、次のことではなかったか。」

これは、ソロモンの神殿が破壊される前、バビロン捕囚の前の状態のことです。この時に、自己満足のために宗教的な儀式を行っていたではないか？ということをお考えさせています。その時は、エルサレムは平和でした。また、イスラエル南部の荒野であるネゲブ地域、またシェフェラと呼ばれるペリシテ人の地とユダの山地の間にある低地において、平穏に暮らしていた時に、預言者が語ったことではないか？と言われています。北イスラエルもヤロブアム二世の時は豊かでありましたが、ウジヤ王が南ユダを治めていた時も、この地域は彼の有能な統治で力を持ち、土地も豊かにされていました。その時に現れたのが、アモスであったり、また少し遅れてミカも出てきました。私たちが数か月前それらの預言を読んだのですが、それらを思い起こせばよいのです。

2B 金剛石のような心 8-14

7:8 ついで、ゼカリヤに次のような主のことばがあった。7:9 万軍の主はこう仰せられる。「正しいさばきを行ない、互いに誠実を尽くし、あわれみ合え。7:10 やもめ、みなしご、在留異国人、貧しい者をしいたげるな。互いに心の中で悪をたくらむな。」

神殿を建て直す工事をしている、それで宗教的にもその儀式を重んじていたのですが、最も大事なことを忘れていました。それは、神を愛することは、兄弟姉妹、隣人を愛することに直接つながっていることです。律法の中に、貧しい者、在留異国人、やもめなどの権利を侵してはならないという戒めがあります(申命 24:17 等)。これらを、飽食の社会において、かつてのイスラエルとユダは、ないがしろにしていました。けれども、宗教的な儀式は盛んに行っていたのです。それでそうしたいけにえは、憎む、忌み嫌うと主ははっきりと言われたのです(アモス 5:321-23 等)。アモスやミカを通して、主はそのことを咎めておられました。

私たちは、主を礼拝するということは、同時に兄弟姉妹を主にあって愛するということが伴います。それで「互いに」という関係が出てきます。それから、周囲の隣人への愛の行為に移ります。時々、慈善的な活動に忙しくなり、教会生活や教会の兄弟姉妹との関係が薄くなる人たちがいます。しかし、主の御心は初めに信仰の家族に良い行いをすることです。「ですから、私たちは、機会にあるたびに、すべての人に対して、特に信仰の家族の人たちに善を行ないましょう。(ガラテヤ 6:10)」それから、周囲の人々に届きます。関係性がとても大事なんですね、礼拝による主との関係、それから主を共に礼拝する者たちとの関係、そして周囲の人々に対する働きかけです。そして、「互いに心の中で悪をたくらむな。」と心のこと、内面にまで主の命令は及びます。詳しくは午前礼拝を聞いてください。

この戒めが、彼らが神殿建設工事をしている時に起こっていたことに気づいてください。主の働きをしている中においても、その中で自分自身の都合を追い求めていくということが起こってしまいます。すると、互いに善を行なうという関係が薄れていくことがあります。それで、仲違いなどの問題も起こります。あるいは、活動だけはやっているけれども、心は伴っていないということも起こります。ピリピ人への手紙は、そうしたことを背景にしています。どちらも熱心な働き手であった、ユウオデヤとストケという女性がいたのですが、二人の間に確執があったようです。それで教会全体でも、そうした確執が影響を与えていました。それで、パウロは手紙を書きました。「ピリピ 2:1-4 こういうわけですから、もしキリストにあって励ましがあ、愛の慰めがあ、御霊の交わりがあ、愛情とあわれみがあるなら、私の喜びが満たされるように、あなたがたは一致を保ち、同じ愛の心を持ち、心を合わせ、志を一つにしてください。何事でも自己中心や虚栄からすることなく、へりくだって、互いに人を自分よりもすぐれた者と思いなさい。自分のことだけではなく、他の人のことも顧みなさい。」互いへの憐れみ、尊敬、愛です。

7:11 それなのに、彼らはこれを聞こうともせず、肩を怒らし、耳をふさいで聞き入れなかった。」7:12 彼らは心を金剛石のようにして、万軍の主がその御霊により、先の預言者たちを通して送られたおしえとみことばを、聞き入れなかった。そこで、万軍の主から大きな怒りが下った。

自分たちが表向きは、人前ではまともに行っている時、主の御言葉によって、実は隠れた動機があ、その動機は汚れているのだと明らかにされると、私たちの心は肉によれば、かなり強く反発します。なぜなら、自分は正しいことを行なっているという自負があるからです。自分が一生懸命であれば、それだけ「なぜ、責められなければいけないの？」と反発心が出て来るからです。ここで、「肩を怒らし、耳をふさいで聞き入れなかった」とありますが、背を向けていくこと、耳をふさぐこと、そのどちらもやっているのですが、一切、聞き入れないという態度です。「金剛石」というのは、当時、中東で最も硬い鉱石だと言われていました。エゼキエルに対して、主が心頑なな彼らに対して、預言をしなさいと言う時に使われました(エゼキエル 3:8-9)。

頑なさというのは、意外なところに出てきます。繰り返すと、自分が確実に間違っていると負い目を

持っている所ではなく、自分は正しいことをしているのだという思い込みがあるところで、困難です。イエス様が、遊女や取税人、罪人が悔い改めることについて語られても、律法学者やパリサイ人たちには、かなり厳しい言葉を語られたのはそのためです。態度を変えることは難しいからです。「ローマ 8:7 というのは、肉の思いは神に対して反抗するものだからです。それは神の律法に服従しません。いや、服従できないのです。」とあります。肉は、決して妥協しないのです。神が命じられることに、とことんまで従わないのです。

7:13「呼ばれたときも、彼らは聞かなかった。そのように、彼らが呼んでも、わたしは聞かない。」と万軍の主は仰せられる。7:14「わたしは、彼らを知らないすべての国々に彼らを追い散らす。この国は、彼らが去ったあと、荒れすたれて、行き来する者もいなくなる。こうして彼らはこの慕わしい国を荒れすたらせた。」

主が人を裁かれる時、その人が悔い改めて、主と共に歩もうとして、それで罪を犯したから、地獄に送るということはしません。主は憐れみ深い方であり、立ち返ろうとする者には必ず命を与えられます。なぜ裁かれるのかと言えば、それは何度呼んでも聞かない、という高ぶりに対してなのです。もし、彼らが主に対して何の関わりを持ちたくないということで心を変えないのであれば、主もこれまで手を伸ばして、守り、養ってきたその手を引かざるをえないということです。主は、一人一人の自由意志を尊重されます。愛の関係ですから、相手が全くその反応を示さないのであれば、そのままにするしかないのです。

そして選びの民、契約の民は、なおさらその現実を味わいます。彼らは、荒れ廃れた土地を見ました。自分たちが今の自分たちであるのは、特別な神の恵みがあるからです。周囲の神を知らない人々が何かにも恵まれていても、似たような恵みを持っていても、まるで意味合いが違います。主が敢えて、与えておられる祝福があり、全く神の憐れみによって、いろいろなものが備えられているのです。放蕩息子のことを考えればすぐ分かります。父のみとにいるからこそ、恵まれていたのですが、それを知らず散在し、放蕩の限りを尽くし、遠い国において何もかも無くなってしまいました。私たちは、当たり前になっていることも、実は当たり前ではない、神の恵みなのだということを思い出す必要があります。

2A エルサレムへの激しい愛 8

しかし主は、帰還した彼らに対して、もうご自分の怒りを示す時は終わったのだという、情熱をお語りになります。ここから、新しい契約の内容に入ります。主が、律法による神の怒りを全て受けてくださいました。神の怒りが全て十字架によって満たされたので、そこにはただ、神の祝福、アブラハムに与えられた約束だけが残ります。全く値なしで受ける祝福、恵みの御業を私たちに備えておられます。その新しい働きを主は、8章で語られます。

1B 真実な町 1-8

8:1 次のような万軍の主のことばがあった。8:2 万軍の主はこう仰せられる。「わたしは、シオンをねたむほど激しく愛し、ひどい憤りでこれをねたむ。」

既に主は、この思いを八つの幻の初めに語っておられました。「叫んで言え。万軍の主はこう仰せられる。『わたしは、エルサレムとシオンを、ねたむほど激しく愛した。(1:14)』」主は、荒れ廃れた土地をご覧になり、エルサレムが廃墟となっているのをご覧になり、そのような悲しみの姿で捨てられていることに対して、ひどい憤りを持っておられます。絶対に、そんなことはあってはならないという憤慨に燃えておられます。それで、主が行なわれることは、回復です。エルサレムを回復することによって、その憤りを治めるのです。

私がエルサレムを訪れた時に、強烈に思い出す旅行ガイドの一言がありました。ホロコースト記念館であるヤド・バシェムでのことです。そこに、子供だけを記念する会堂があります。そこに入ると、無数の星の輝きがあります。その一つ一つが、殺された子供を表しています。そして、死亡が確認された子供の名前が読み上げられています。そこを出ると、エルサレムの山々の中腹に立ち並ぶ住宅の姿が出てきます。そしてユダヤ人のガイドはこう言ったのです。「これこそ、私たちの復讐です。」ドイツ人に復讐して殺すのではなく、子供が幸せに暮らし、育つ家庭を築くことこそが、彼らが意図していた悪意をくじく最も効果的な方法です。主なる神は、罪によってずたずたにされた人生を、ご自分の恵みによって立ち直らせることによって、ご自分の憤りを示されるのです。こんな情熱的な愛を神は抱いておられます。

8:3 主はこう仰せられる。「わたしはシオンに帰り、エルサレムのただ中に住もう。エルサレムは真実の町と呼ばれ、万軍の主の山は聖なる山と呼ばれよう。」

主が帰ってきてくださることについても、既に 2 章 10 節で語っておられました。「シオンの娘よ。喜び歌え。楽しめ。見よ。わたしは来て、あなたのただ中に住む。..主の御告げ。..」主が帰って来られる、という表現、そこには切望や待望、恋い慕う思いがあるでしょう。モーセは、荒野の旅をイスラエルの民と共にしている時に、雲の柱が留まるとこう祈りました。「主よ。お帰りください。イスラエルの幾万の民のもとに。(民数 10:36)」主がお帰りになるということは、そこに主が住まわれることです。主がご臨在されることです。そこで、預言には、主が戻られる、主が来られるという約束に満ちています。そしてゼカリヤ書には、主が初めに来られることと、再び来られることのどちらもが預言されています。初めとか、二回目とか、そのような区別は書かれていません。ただ、主が来られるとだけ書かれています。私たちは、既に来られたキリストを喜んでいますが。聖霊によって、主が只中におられることを喜んでいますが。そして、天から再び来られること、再臨されることを待ち焦がれているのです。

そこで大事なことがあります。主がご臨在される所は、必ず真実があり、そして聖さがあるというこ

とです。ここで彼らが欠けていたところがあったのです。表向きは熱心であっても、内実は自分自身を求めていたという問題がありました。つまり、偽っていたのです。しかし、真実な町であります。そして、「聖なる山」です。ヨエルもこう預言していました。「3:17 あなたがたは、わたしがあなたがたの神、主であり、わたしの聖なる山、シオンに住むことを知ろう。エルサレムは聖地となり、他国人はもう、そこを通らない。」聖なる山、悪い思いや汚れがないところ、無慈悲などそういった汚れがないところがあります。表向き、素晴らしい会堂、素晴らしい建物、素晴らしいプログラム、活動であっても、内実が伴っていなければ、意味がない、主がそこにおられないということになります。

8:4 万軍の主はこう仰せられる。「再び、エルサレムの広場には、老いた男、老いた女がすわり、年寄りになって、みな手に杖を持とう。8:5 町の広場は、広場で遊ぶ男の子や女の子でいっぱいになろう。」

なんと平和に満ちた、のどかな光景でしょうか！これを聞いていた、帰還した代表者たちは、耳を疑ったことでしょう。絶えず、攻撃や危険にさらされているエルサレムです。しかし、そこにのどかな姿があります。その理由は、何か？すぐれた軍隊や警察がいるからでしょうか？いいえ、2章4-5節で、御使いが答えていました。「2:4-5 そして彼に言った。「走って行って、あの若者にこう告げなさい。『エルサレムは、その中の多くの人と家畜のため、城壁のない町とされよう。しかし、わたしが、それを取り巻く火の城壁となる。…主の御告げ。…わたしがその中の栄光となる。』」城壁がないのです。しかし、主ご自身が城壁となっておられるので、このように彼らは平穩の中でのどかに暮らすことができます。主こそが、私たちの安全となっておられます。

8:6 万軍の主はこう仰せられる。「もし、これが、その日、この民の残りの者の目に不思議に見えても、わたしの目に、これが不思議に見えるだろうか。…万軍の主の御告げ。…」

あまりにも信じがたい幻、約束なので、不思議に見えるだろうか？と問われています。イザヤ9章6節、主がご降誕される預言には、「不思議な助言者」と呼ばれることが書かれています。私たちの思いをはるかに超えて、事を行なうことのできる方です。しかし、私たちの主の目には、不思議でも何でもありません。歳が間もなく90歳になるサラが、子を宿すと約束された時に、「創世18:14 主に不可能なことがあろうか。」との言葉がありました。私たちには、自分たちの理解をはるかに超えている不思議なことであっても、神には何でもできるのであり、不思議なことではないのです。

8:7 万軍の主はこう仰せられる。「見よ。わたしは、わたしの民を日の出る地と日の入る地から救い、8:8 彼らを連れ帰り、エルサレムの中に住ませる。このとき、彼らはわたしの民となり、わたしは真実と正義をもって彼らの神となる。」

主は、ここでバビロン捕囚からの帰還の約束をしておられるのではありません。なぜなら、既に帰

還しています。そして、「わたしの民を日の出る地と日の入る地から」と言われています。バビロンであれば、日の出る地だけであります。けれども、西である日の入る地からも来るということは、全く異なる次元の離散の話をしていて、そこからの期間の話をしているのです。主は確かに、世界離散からのユダヤ人の帰還の約束をされています。「イザヤ 43:5-6 恐れるな。わたしがあなたとともにいるからだ。わたしは東から、あなたの子孫を来させ、西から、あなたを集める。わたしは、北に向かって『引き渡せ。』と言ひ、南に向かって『引き止めるな。』と言う。わたしの子らを遠くから来させ、わたしの娘らを地の果てから来させよ。」これは、旧約時代の約束ではなく、イエス様が、ご自身が天から地上にお戻りになる時に実現することを語られました。「マタイ 24:31 人の子は大きなラッパの響きとともに、御使いたちを遣わします。すると御使いたちは、天の果てから果てまで、四方からその選びの民を集めます。」

そして、主が真ん中に住んでくださるエルサレムに、彼らを住まわせてくださいます。ゆえに、当然ながら非常に近い関係になるのであり、「彼らはわたしの民となり、わたしは彼らの神となる。」となるのです。このような個人的な神との関係を持つのは、エレミヤ書 31 章 33-34 節に書かれている、新しい契約のためです。そこで、石の板に書かれていた律法が、心の中に書き記されることが約束されています。エゼキエル書 36 章によると、御霊によってその心の一新が行なわれることが約束されています。その御霊の注ぎを、キリストを信じる者たちに行なってくださいます。そして、天のエルサレムの幻を見てみましょう。「黙示 21:3 見よ。神の幕屋が人とともにある。神は彼らとともに住み、彼らはその民となる。また、神ご自身が彼らとともにおられて、(また彼らの神となる。)」

この約束は、他の預言書にも数多くあります。ここゼカリヤ書で特徴的なのは、それが、「真実と正義をもって」と書いてあるところなのです。先ほどの話に戻るのです、真実を語る、また人々との正しい関係を持っている中で、主なる神との個人的な関わりを持つのだということです。

2B 平和の種 9-17

8:9 万軍の主はこう仰せられる。「勇気を出せ。あなたがたは、万軍の主の家である神殿を建てるための礎が据えられた日以来、預言者たちの口から、これらのことばを日ごろ聞いているではないか。
8:10 その日以前は、人がかせいでも報酬がなく、家畜がかせいでも報酬がなかった。出て行く者にも、帰って来る者にも、敵がいるために平安はなかった。わたしがすべての人を互いに争わせたからだ。

主は今、かつてハガイを通して語られたことを繰り返しておられます。自分たちが、主の家を差し置いて、杉の木で自分たちのための家を建てていた時に、ここに書かれている通り、収穫は不作であったことをハガイは語りました(2 章 15-19 節)。しかし、第九の月の二十四日からよく考えなさいと言われたのです。その日から、わたしはあなたがたを祝福しようと神は約束されました。私たちが、たとえ過去に罪を犯したとしても、そしてその罪の影響が今も続いていたとしても、悔い改め主に立ち返

っているのであれば、主は真新しい働きを既に行われているのだということです。これが、私たちのキリスト者としての歩みです。かつて、カルバリーチャペル・コスタメサで、新しい信者の学びに参加した時に、ある姉妹が証しを皆にしていました。彼女はユダヤ人、麻薬などもやっていました。そして、エイズにかかったのです。しかしその後、彼女は救われました。エイズは癒されることはありません、けれども主は確実に彼女の魂を癒し、救われました。罪の影響が残っていたとしても、主は確実に祝福してください。

そしてゼカリヤの預言では、「わたしがすべての人を互いに争わせたからだ。」という言葉が付け加えられています。自分自身を求めている時に、仲違いが起こります。そして、互いに争いをするように主がされています。それは、自分たちが主のために生きているというところに、立ち戻らないといけないからです。自分が主のために生きるなら、そこにはへりくだりがあります。他の人を自分よりも優れているとみなすことができます。全てのこと、良いこと、称賛に値することに心を留めることができます。しかし、自分のことを求めているのであれば、その人の周りでは、確執が起こっていることでしょう。この人と合わない、あの人と合わないと言って、関係を切っていくのですが、また会う人も合わないとなります。理由は、自分自身が人から何かをしてもらう、自分の願いが聞かれることを求めているからです。そのような争いがある時に、そこに主がおられないということを、一度、思い直してみるとよいと思います。

8:11 しかし、今は、わたしはこの民の残りの者に対して、先の日のようなのではない。..万軍の主の御告げ。..

ここの「しかし、今は」という言葉が大事です。これまで肉にあって生きていた者が、どんなに酷いところを通っても、絶望的に思えても、「しかし、今は」という主の新しい働きを期待することができるのです。それは、新しい契約の特徴です。パウロが、ローマ人への手紙でも同じことを書いていたのを思い出せませんか？「すべての口がふさがれて、全世界が神のさばきに服する」と言いましたが、「3:21-22 しかし今は、律法とは別に、しかも律法と預言者によってあかしされて、神の義が示されました。すなわち、イエス・キリストを信じる信仰による神の義であって、そればすべての信じる人に与えられ、何の差別もありません。」と続きます。信仰によって義と認められる真理を明らかにしたのです。どうか、これまで悪循環でどうしようもない生活や人生を歩んできたと思っても、「しかし、今は」の生活を神が用意しておられるのだということを知ってください。

8:12 それは、平安の種が蒔かれ、ぶどうの木は実を結び、地は産物を出し、天は露を降らすからだ。わたしはこの民の残りの者に、これらすべてを継がせよう。

主が来られれば、豊かな収穫を神はイスラエルの地において約束しておられます。預言の中に、神の御国における収穫の回復は、たくさん書かれています。けれども、ここで興味深いのは、その種

が「平安の種が蒔かれ」と言っているのです。豊かにされていた時に、イスラエルでもユダでも、無用な血が流されていました。それでも、豊かさはあったのです。しかし、その豊かさは彼らの罪と不義のゆえに、ついに取り除かれました。しかし今度の豊かさは、平安という裏付けがあつての豊かさです。それは持続します。地味に見えても、必ず義の実を結ばせます。箴言にも、「17:1 一切れのかわいたパンがあつて、平和であるのは、ごちそうと争いに満ちた家にまさる。」という言葉があります。

そして、教会の中で平和の種を蒔くことについて、ヤコブがこう話しました。「3:17-18 しかし、上からの知恵は、第一に純真であり、次に平和、寛容、温順であり、また、あわれみと良い実とに満ち、えこひいきがなく、見せかけのないものです。義の実を結ばせる種は、平和をつくる人によって平和のうちに蒔かれます。」ヤコブの手紙は、もちろん教会の人々に書かれています。彼らが、いろいろな知識をもって正しさを主張したとしても、争いがあるならば、それは誇つてはいけません。それは、地に属し、肉に属し、悪霊に属していると、はっきりとヤコブは言いました。それに対して、上からの知恵は、平和の実を結んでいると言っているのです。

8:13 ユダの家よ。イスラエルの家よ。あなたがたは諸国の民の間でのろいとなつたが、そのように、わたしはあなたがたを救つて、祝福とならせる。恐れるな。勇気を出せ。」

すばらしいのは、ここで、ユダの家のみならず、イスラエルの家に対しても主は語られていることです。ソロモンの死後、イスラエルが分裂して、北イスラエルと南ユダに分かれましたが、主が回復される時に、その分裂をも癒してくださいます。エゼキエル書 37 章の後半には、二つの杖を一本にしなさいと神がエゼキエルに言われて、それが南北の王国が一つになる約束がされています。一つにされて平和になるというのは、大いなる祝福です。

8:14 万軍の主はこう仰せられる。「あなたがたの先祖がわたしを怒らせたとき、わたしはあなたがたにわざわいを下そうと考えた。…万軍の主は仰せられる。…そしてわたしは思い直さなかつた。8:15 しかし、このごろ、わたしはエルサレムとユダの家とに幸いを下そうと考えている。恐れるな。

主が、心をはっきりと思い直されていることを強調しています。これまでは、御怒りを現わしていたけれども、今は、はっきりと幸いの計画を立てているということです。エレミヤ書にも、その約束がありました。「エレミヤ 29:11 わたしはあなたがたのために立てている計画をよく知っているからだ。…主の御告げ。…それはわざわいではなくて、平安を与える計画であり、あなたがたに将来と希望を与えるためのものだ。」神は、御子にあつて御怒りを十字架の上であらわされたけれども、今は、はっきりとアブラハムの祝福を貴方に与えるよ、と約束されているのです。しかし、どうしても過去の自分のことを思い出し、恐れてしまいます。なので、何度も何度も、主は、「恐れるな」と励ましておられます。

そして実は、「わたしはあなたがたにわざわいを下そうと考えた。」と過去に、主がしたと言われるこ

とにも、慰めがあるのです。災いが来たのは、神の御手の中で行われたのだ。神が行なわれたのであれば、神が回復することができるということです。今は、打ちひしがれていても、主が必ず恵みを施して下さいます、いやもう既にその働きを始めておられます。

8:16 これがあなたがたのしなければならないことだ。互いに真実を語り、あなたがたの町囲みのうちで、真実と平和のさばきを行なえ。8:17 互いに心の中で悪を計るな。偽りの誓いを愛するな。これらはみな、わたしが憎むからだ。・・主の御告げ。・・」

再び、真実の中に生きること、平和を保つこと。そして心の中で悪意を持たないこと。偽りの愛を持たないことを教えています。主は、偽りを憎まれます。「愛には偽りがあってはなりません。悪を憎み、善に親しみなさい。(ローマ 12:9)」新しい契約における主の命令は、旧約の時代と異なります。「あなたがたが、わたしの命令を守り行ないなさい。そうすれば、わたしは祝福しよう。」というものでした。自分の従順が、神の祝福を決定します。新しい契約では、「わたしはあなたを、祝福する。だから、あなたがたはわたしの命令に聞き従いなさい。」であります。今ここでも、彼らに主は既に幸いを与えることを決めておられます。決めておられるからこそ、その幸いにふさわしい行いをしなさいと言われていきます。真実を語ること、平和の裁きを行なうこと、心で悪を計らずに、偽りの誓いを取り除くこと。そうすれば、主の祝福がことごとく自分たちの中から、自分たちを通して流れ出てくれるのです。御霊の働きです。

そして、主が憎まれることを知っておく必要がありますね。主が悪を計ること、愛について偽っていること、そうしたものを憎んでいるという感情をお持ちです。

3B 恵みを請う人々 18-23

8:18 さらに、私に次のような万軍の主のことばがあった。8:19 万軍の主はこう仰せられる。「第四の月の断食、第五の月の断食、第七の月の断食、第十の月の断食は、ユダの家にとっては、楽しみとなり、喜びとなり、うれしい例祭となる。だから、真実と平和を愛せよ。」

主は、ここでようやく、ベテルから遣わされた者たちに対する答えを与えておられます。断食を続けるべきかどうかということについて、楽しみと喜びの例祭となると約束されます。ここで主は、先の第五の断食と第七の断食の他に、彼らは実は第四の月の断食と、第十の月の断食も行なっていたようです。第十の月は、ネブカデネザルがエルサレムの町を包囲しはじめた月です(2列王 25:1-2)。第四の月は、包囲されたエルサレムの町が破れた時です(2列王 25:3-4)。彼らは、ある意味でかなりの「反省」はしていました。けれども、その反省でさえも、自分中心なものになっていました。ありがたいです、私たちが自分に反省している、自分が嫌になっているようであり、まだ自分を愛しています。正しい基準は、私たちがどう思い、感じるかではなく、主ご自身がどう思われ、感じておられるかを求めて、そのことを第一とすることです。悔い改めるのは、自分を見つめること以上に、向きを変えること。

主のほうに向くことです。

主は、罪を赦してくださいました。もやは、災いではなく、幸いの計画を立てておられます。ですから、その救いの中で大いに喜び、楽しむのです。城壁の再建の時も、ネヘミヤは同じ励ましをもって励ましました。律法を聞いている民が悲しみ始めました。けれども、エズラもネヘミヤも、「きょうは、私たちの主のために聖別された日である。悲しんではならない。主を喜ぶことは、あなたがたの力であるから。(8:11 別訳)」と言いました。そして最後に再び、「真実と平和を愛せよ。」と繰り返されます。

そして次から、主は、喜びと楽しみに満ち、また真実と平和に特徴づけられたエルサレムに対して、イスラエルの神をそれまでは知らなかった国々が引き寄せられていく様子を預言されます。

8:20 万軍の主はこう仰せられる。「再び、国々の民と多くの町々の住民がやって来る。8:21 一つの町の住民は他の町の住民のところへ行き、『さあ、行って、主の恵みを請い、万軍の主を尋ね求めよう。私も行こう。』と言う。8:22 多くの国々の民、強い国々がエルサレムで万軍の主を尋ね求め、主の恵みを請うために来よう。」

互いに憐れみを示し、平和の裁きを行ない、真実である交わりには、人々は寄せ付けられます。かつてダビデのところには、イスラエル人だけでなく、周囲に住む異邦人もやってきました。それは、主の恵みがダビデに留まっていたからです。そして、ソロモンが統治していた時に、その平和と知恵によって、さまざまな国が謁見に来ました。シェバからも女王が来ましたね。それと同じように、いやそれ以上に贖われたエルサレムのところに国々がやって来ます。その理由が書かれています、「主の恵みを請い、万軍の主を尋ね求めよう。私も行こう。」主の恵みが満ちあふれているからこそ、そこで主を尋ね求めようとしています。神の恵みは人々を引き付けるのです。

8:23 万軍の主はこう仰せられる。「その日には、外国語を話すあらゆる民のうちの十人が、ひとりのユダヤ人のすそを堅くつかみ、『私たちもあなたがたといっしょに行きたい。神があなたがたとともにおられる、と聞いたからだ。』と言う。」

これは驚くべきことです。一人のユダヤ人が、神が共におられるということで、人気歌手であるかのように十人の異邦人によって引っ張りだこになっています。それだけ主がおられることに、恵みがあるから魅力があるのです。私たちが、どのようにして人々が救われるのを目撃できるのでしょうか？それは、私たちが新しい御霊による、神の働きの中に入ることです。恵みの中に入ることです。そして、真実と平和の中に生きることです。その中で、神が救われる人々を、教会の交わりに加えてください。